

電話

原島 良成(熊本大学准教授)

大学院生の研究室は図書館の中にあり、M/D問わず机を並べる大部屋だった。30名ほど所属していただろう。ちょっとした喫食スペースもあって、そこには黒電話が置かれていた。教員が指導学生に掛けてくることもあったが、専ら院生同士の連絡用。近くにいる誰かが電話を取って、本人がいなければ伝言メモを残す。

秋学期が始まった頃。M1のHが自席に戻ると、「cielo先生からお電話がありました」と伝言メモがあった。「cielo(シエロ)」とは、後に彼のことをそう呼ぶことになる、院生間の符牒である。それにしても、cielo先生とは面識がないし、ゼミを取る予定もなかった。恐る恐る掛け直してみると、「おお、キミがH君か。話したいと思ってたんだ。ラーメンでも食べに行かないか。」

その年の夏、Hは2か月間フライブルクに滞在していた。初めての海外体験であり、無謀にも初めてのドイツ語体験であった。どこからかその噂を聞きつけたcielo先生は、Hのサバイバルに興味を示したのだ(途中、9.11同時多発テロが発生し国際情勢は一気に緊迫した)。ドイツ語会話はモノにならなかったが、ハイデルベルクなど周辺に足を延ばして見聞きし感じたことをHが話すと、いつしか先生の笑顔はかき消え、まるで修士論文構想発表会の様相となっていた。

もとよりcielo先生はドイツ法研究の達人であり、片言の英語で急場を凌ぎ恥をかき捨ててどうにか帰国した院生の話などに、感銘を受けるはずもない。その年の冬にはドイツの大学で講義する予定があるとも聞き、Hは話しながら居心地の悪さを募らせていた。しかし先生は、深刻そうな面持ちで、Hのちょっとしたドイツ語の発音を褒め、自分がドイツから帰ったら一緒にクレプファー環境法を読まないか、と話の舵を切ったのである。「院生時代キミと同姓の先生にお世話になったんだ。」

翌年、民法の先輩を巻き込んで読書会が始まった。一文ずつの和訳に「ん？いや、ちがう。」「えーと、もう一度…ちがいます。」「フッフッフ。全然ちがう。」と、cielo先生の忍耐力を試すだけに終わりそうだったが、ある時、先生は受講生にドイツ語で書かれた小説の一節を渡し、もう一度舵を切った。人数分のコーヒーを買ってこさせ、先生はその、ロマンティックなような、それにしてはぎこちなくてほんのり暗い、B級映画を思わせる筋書を解説した。ドイツの人と社会そして言葉がcielo先生をどのように深く惹きつけているのか、それだけは伝えようとするかのように。数年後、Hは冬の旧東独ライブツィヒに降り立つ。

結局、Hはドイツ語で研究を深めることなく職を得て、cielo先生の故郷近くへと赴任した。今度はHの携帯に先生から「結婚したんだって？お祝いするよ。」指導教員ではなく、研究面で議論した間柄でもない。「長い論文書くなよ。誰も読まないから。」くらいのアドバイスだった。しかし福岡の寿司屋で妻を紹介し、Hは、cielo先生は確かに自分が師と呼ぶべき一人だったと感じた。

久しぶりにまた、cielo先生から着信。折り返すと「ああ、H君か。実は、キミのことが誰だかわかりません。」先生は大病を患い、投薬の影響で心身ともに非常に不安定な状況にあった。慌てて妻と見舞いに行ったHの前に、先生は痩せ衰え見る影もない姿で現れた。眼光鋭く自らの闘病体験を語り、「君のことを良く覚えていないけど、きっと大事な知り合いだと思って電話しました。」その時を最後に、あの深刻さを絵に描いたようなcielo先生に会うことはなかった。

数年後、震度7の大地震が連日Hの赴任地を襲った。気づけば携帯にcielo先生の着信記録が。Hが折り返すと、名乗るか名乗らないかのうちに「生存を確認。安心しました。では、切ります。」大病を克服した先生はやや陽気になったような気もしていたが、この深刻な局面で聞いた懐かしいcielo先生は、曇天のライブツィヒですすったグリュエヴァインのように、Hの全身に染み渡った。